

---

# 淵物語 こよみキラー

モブキャラA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

淵物語 こよみキラ

### 【Nコード】

N9182Z

### 【作者名】

モブキャラA

### 【あらすじ】

少女は路上で目を覚ますと、記憶の一切を失っていた。自身が何者であるかを考察する間もなく、謎の怪異に襲撃を受ける。万事休す。打つ手のない窮境に絶望していると、そこに偶然に阿良々木暦が通りかかり――。

## プロローグ（前書き）

傾物語的な作風を意識しました。西尾維新が好きなだけのただの雑魚ですが、暇潰し程度には貢献できれば嬉しいです。

## プロローグ

聖なる夜と呼ばれて然るべき12月24日の夜中。25日を僅か数十分後に控えた人々が賑わう中で、阿良々木暦は狂気に駆られていた。彼が何者かに対して明確な殺意を抱いたのは、おそらくは春休み以来である。ただし、あの頃とは異なり、彼が狂気から解放される手段は、目的の達成——とどのつまり対象の殺害以外には有り得ないだろう。

「絶対に許さない——お前だけは——絶対に！」

目を凝らせば骨すらも露出していることが伺えるほどにえぐられた右肩。

おそらくは彼自身のものであろう血飛沫によって、赤く染められた直江津高校の制服。

そして彼の隣で力無く横たわる一人の少女、戦場ヶ原ひたぎ。

人々が遊興に勤しむことを意図して建設された遊園地の、まだ使用されていない準備中のお化け屋敷は、もはやどうしようもなく惨劇の場へと変貌を遂げていた。私はそれをただ見ていることしか出来ない。吸血鬼と人間のヴァンパイアーフである私には、ただ見ていることしか出来なかった。

そして私は回想する。

今に至るまでの物語を。

今に至るまでの過ちを。

過ちに至るまでの過ちを。

## ブローグ（後書き）

やめて、石は投げないで石はッ！

## ふみひとブラッド（前書き）

オリキャラが主人公というのはどうなのだろうかと思います。やはりメインをメインにするべきだったかも。

## ふみひとブラッド

酩酊しているかのような頭痛と共に、私は目を覚ました。

激しい吐き気や不快感に襲われながらも、なんとか気を確かに保とうと冷静に思考を廻らす。

思い出せ、私はどうしてここにいます？ 私？ 私とは誰だ？

……………。

……………。

よし、一度言ってみたかったんだ。

「私は誰？ ここは何処？」

しかし不思議だ。何一つとして思い出せないにも関わらず、その台詞を一度言ってみたかったということは明確に覚えている。それに、当然の如く日本語を操れることから、やはり記憶喪失ということ間違いなさだろう。決して記憶が消失したわけではない。

ふと、辺りを見渡す。特に描写すべき点も見当たらない。ごくごく普通の公園だった。ただ一つ異様なのは、まったくと言っていいほど人の気配を感じ取れないという点のみだ。おそらく田舎であるという認識で間違いなさだろうけれど、それにしても寂しい街だなあ。

「あ」

出口付近に地図がある。

私は近所に助けになりそうな建築物がないかどうかを確認するべく出口付近の地図を確認しに行った。一步一步の力が思っていたよりも力強く、予想していたよりも早く地図に辿り着いた。

「あ」

交番を見つけた。幸いなことに割りと近所にある。

「よし、見つけたぞ！」

「よし、見つけたぜ！」

木霊のように同じ口調、同じ声音で誰かが復唱した。

しかし残念なことに、最後の一文字だけ間違っている。

「——ッ！」

咄嗟に声の主に目を向ける。

そこには、学ランを着用した童顔の少年が立っていた。

道を聞けば教えてくれそうな、どう見ても害のある存在には見えなかった。けれど、私の中の生物としての本能は、そうは言っていないかった。私に対して強く訴えかけていた。

——逃げろ！

「ええつと、誰ですか？」

「ひ……酷いよ！ 覚えてないなんて！ 僕達友達だろう！」

心底悲しそうな表情でそう言う少年。しかし私には、その少年の全てが白々しく映った。

「ご……ごめんね、記憶喪失なんだ」

「記憶喪失！？ それは大変じゃないか！ どうして早く僕に言ってくれなかったんだ！ 全部僕にまかせて、僕達は親友なんだからね！」

「そうなんだ……ありがとうね……」

信用しきった声音で私はそう言った。しかし本音は、隙あれば逃げるという考えだ。背を向けた瞬間に逆方向に逃げてやる。

「僕についてきて」

少年が背を向けた。

私はその隙を逃さなかった。

少年が足を一歩前に踏み出すよりも素早く、私は脚に混信の力を込めて地面を蹴った。何度も何度も蹴り続け、あっという間に塀を飛び越え、公園から脱出した。

ここまで来れば大丈夫だろう。

「どこまで行っても大丈夫じゃないよ」

ぐちゃり。

何かが潰れるモロい音がした。

その音が私の耳を駆け巡ると同時に、腹部に尋常ではない激痛が

走った。

反射的に腹部に目を向ける。

そこには、噴水のように激しく血液が噴出していた。

そのことを認識した途端、今までを遥かに上回る激痛が私に襲い掛かった。

「あああああああああああああああああああああああ！  
悲鳴をあげる。」

「うん、いい音だ。とてもとてもいい音だ！」  
少年は、健気な口調でそう言った。

「あ、記憶喪失ということとは、自己紹介しといたほうがいいかな？」

一文爾。

それが私を。

そして暦ちゃんを地獄の底へと突き落とす人でなしの名前だ。

チツクシヨウ！

私は一文爾に背を向けると、ひたすら走り続けた。

腹部をあのレベルで損傷しておきながら走れるというのは不思議なものだが、しかし人間、極限状態になると大抵のことはできるものらしい。とは言え、今はそんなことを言っている場合ではないだろう。

「ダメだよ動いちゃ！ 怪我をしてるじゃないか！」

心底心配そうな声音で一文爾は言った。

ふざけた奴だ。

ふぬけた奴だ。

「はあはあはあはあ」

荒々しく息を吐き、懸命に腹部を抑えつけながら私は曲がり角を  
覚束無い足取りで曲がった。

ダメだ――

意識が遠のいていく――

と。

そこに、二人の男女が通りすぎた。

驚愕の表情を浮かべる少年と、無表情な女性。

「おい！ お前——大丈夫か！？」

まるで自分のことのように駆け寄る少年。

それが、暦ちゃんとの最初の出会いだった。

## ふみひとブラッド（後書き）

暦ちゃんの格好良さは異常。

惚れてまうやる！

ひたすら暦が格好良いだけのお話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9182z/>

---

淵物語 こよみキラー

2011年12月28日21時58分発行